

文藝春秋

本苑子

滝沢馬琴

下



滝沢馬琴 下

昭和五十二年七月十五日 第一刷
昭和五十三年四月十五日 第二刷

定価 九八〇円

著 者 杉 本 苑 子

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三

印刷 大日本印刷
製本 大日製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

滝沢馬琴
下

二十

四谷信濃坂に移転後、はじめての晩春がめぐつてきた。

朝、馬琴が縁に出て、胸を叩き臉をこすり……という、例の日課の健康法をくり返していると
ころへ、大きな竹籠を前後に二つ天秤棒で差し担いだどこかの下男か百姓ふうの若者が、すた
すた門をはいつてき、玄關まで十四、五間ほどの通路の片側にむさくるしく茂っている竹藪へも
ぐりこんだ。手に刃先のがった大鑿と、金ペラをさげているところをみると、笥を掘るつもり
であろう。馬琴と目を見合せながら挨拶もしない。藪は地主のもの、当然な顔をして男が歩いて
きた門内の道は、しかし地代を払って借りている滝沢家の地所である。

古家の、だだっ広さに比例して敷地も広い。明神下の旧居とはくらべものにならない。それだ
けに手が回りきらず、越してきた当初ほどではないが敷地内は荒れていた。『猫額大の小庭』と、
知友への書面などには自嘲した表現を使っていたけれど、明神下の庭は舐めるように楽しんで、手入
れも植木屋も欠かさなかったものである。宗伯の草取りは丹念さを通り越してほとんど偏執狂的

といつてよかつたし、馬琴自身の氣ばらしも庭いじり一つに尽きていた。

宗伯が死に、信濃坂に移つてからは、だがその氣力も、興味すら萎えた。嫁のお路と婿の清右衛門が去年の古落葉を熊手で掻き出し、枯れ伏して憂も根も、からまり重なっている雑草を刈り払つても、下からもう今年の草が、びっしり生えはじめているうつつうしさである。真夏のいきれが思いやられた。

ぐるりを囲う四ツ目垣は腐朽がひどい部分だけ竹を結び替えたから、新旧入りまじつてかえつて見ぐるしい。これも朽ち木にちかい自然木が表通りに面して二本、扉もなにもなく突つ立っているのが門で、地主の竹藪とは、境界を仕切る杭ひとつなかった。

季節になれば筍が生える場所だし、『瓜田に履をいれず李下に冠をたださず』を信条とする馬琴はにがしがって、かねて家族たちにも、

「藪へは一步も踏みこんではならんぞ」

厳重に言い渡していたやさきだけに男の鬨入は氣になった。

たぶん地主から命じられてきた掘り子ではあろうけれども、ひとことの挨拶もせず、大きな顔で門内を通りぬける無礼は我慢なりがたい。

起きぬけ早々馬琴は不快になり、嫁を呼んでどこの何者か、男の素性を訊きたださせたが、もどつてきてのお路の報告は、やはり、

「地主さんとお使いだそうです」

と言うものだった。

「これからしばらくのあいだ、毎朝きて筍を掘ってゆくと言つてました」

書齋にとつて返し、馬琴は一氣呵成に、いささか切り口上手な手紙を地主あてに書いた。

『ただいま貴家の使いと称する者が、なんの断りもなく敷地内を通り、笥掘りをしているが、それでなくても当方としては、成りものの番人をいやおうなく押しつけられたかたちで、気重くもはた迷惑にも思っていたところである。藪の周囲には垣を結い、往来に面した方へ木戸でもつけて、掘り手はそこから出はいりするよう御手配ねがいたい』

だいたいそんな文意だった。

男に届けさせようと急いで封じて、

「お路、……お路」

いま一度、嫁を呼んだが返事がない。ふだんから打てば響く受け答えはしない女である。相手には聞こえないようななま返事をぼそぼそ口の中でし、むすツとした顔つきで襖ふすまをあけるのが習性だが、それにしても来かたが遅い。

縁さきに出て馬琴が見回すと、お路、お百、太郎やさちまで、総出で笥掘りの手ぎわに見とれているさいちゆうであつた。

家族どものその背中つきが、馬琴の目にはいかにもものほしげな、卑しいものに写った。

「そんなところで何をしている。家へはいりなさいッ」

大声で叱られて、女たち子供たちは不満顔をならべながらそろそろもどつて来た。

「まだ頭も出していないんだよ、地面がちよっぴり持ちやがつているだけで、あの人、笥のあるところがわかるんだもの、すごいだろ。お祖父ちゃんも見れば面白いのに……」

太郎ばかりでなく、お百やお路までが下町育ちだけに、笥など八百屋の荷台か店先に積まれているのしか目にしたことはないのだろう。馬琴はしかし、

「面白いものか。なにが、そんなもの……」

不機嫌にきめつけ、

「高畑先生のお宅へ出かける時刻じゃないか。どうもお前は、学びに不熱心でこまる」

太郎を学塾へ追いやった。

小風呂敷を片脇に、すつとんで出てゆくしろ姿と入れちがつて、門をはいつてきたのは清右衛門である。筍掘りの男とそっくりな竹籠を、これも天秤棒で担っているが、中味は胡瓜、茄子、南瓜などの苗であった。

「菜園をつくる気か」

「味噌汁、漬けものの実ぐらいは自家で賄^{まふな}われるといいと思ひましてね」

空地はあるのだし、そのつもりで冬のあいだから穴に落葉を溜めて腐らせておいたのだ、と語る婿へ、

「たすかるよ清さん」

お百がこぼした。

「なにしろ不便なところでねえ。八百屋魚屋の買物はいちいち六軒町まで出なきゃならないし、いまもこれからさちをつれて行くところだが、銭湯はお岩^{いなり}稻荷の角にあるんだよ。湯にはいるのに半日がかりだもの、いやになっちゃう」

「文句はいいから、出がけにこの手紙を筍掘りの男に渡しなさい。宛て名は地主だ」

と言いつけて馬琴は書齋に引きとり、清右衛門は裏へ廻って行った。

湯道具を手に、お百もさちをつれて出て行き、いつのまにか筍掘りさえ去ったらしい。やつとりもどした静かさの中で、それからしばらく、『八大伝』九輯下の中の執筆に馬琴は没頭した。

廁^{かわや}に立ったのは、一ッ時ほどしてからだろうか。小窓の外にひろがる裏の空地で、清右衛門と

お路が立話しているのが見えた。すっかり耕やされ、整然と畝立った黒土は、つい昨日までの荒れを忘れたように、たのもしげな畑地に変貌していた。

等間隔に、そこに茄子苗を植えてゆく清右衛門のごごみ背も、本来の百姓に還っている。交されている会話を生まれ故郷の村のはなしであった。

「繭を売って、やっと土間から座敷までひろびろとしたと思うともう、麦の刈り入れです。たちまちまた足のふみ場もなくなってしまう……。貧しい村ですからね。祭なんぞも淋しかった」

「でも、ご馳走をつくるのでしょ？」

「煮しめに濁酒、餅ぐらいなものです。わたしら餓鬼の時分は山桑の実を採り溜めましてね、口の中じゅう紫色にしながらトントコ、トントコ、太鼓を叩くのが祭の楽しみでしたよ」

「そのころの清右衛門さんのすがた、何だか目に見えるようですよ」

小用を足し終ったあとの、ころよい放心の中に立ちつくして、聞くともなく二人のやりとりに耳をかたむけた馬琴は、お路の語調に、これまでにない暢びやかさ明るさを感じて、ふっと、軽い動揺をおぼえた。

宗伯に死に別れてからの変化である。滝沢家の人として、生涯、後家を通す決意か、書画会前後のごたごたにも、ひきつづいての引越しさわざにさえお路が泣きごと一つこぼさず、二人の子供と舅姑の世話に集中してくれたのはありがたかったが、夫に死なれて元氣をとりもどすというのは、それまでの生活がいかに彼女にとって憂鬱なものだったかをのたるとる証であり、よくぞ耐えてくれたと感謝する半面、馬琴の親ごろころには、宗伯が生前、噛みしめつづけたであろう味気なさもまた、思いやられて、亡息が哀れになるのだった。

お百とさ、ちが錢湯から帰り、きっちり正午に太郎も學塾からもどつて、家の中はふたたびさがしくなりはじめた。

今日習ったところを太郎はかならず祖父の前で、もう一ぺん復習させられる。十歳の彼は明神下時代に、すでにいろは歌、村づくし、国づくし、往来ものをあげ、いま童子訓と実語教、素読は小學をまなんでいた。

昼食のあと、書齋の見台にかしこまつて、

「司馬溫公曰く、凡そ諸々の卑幼は事大小となく、專行することを得る母かれ……」
つかえつかえ読んでいるところへ、

「ごめんください」

おとなう声が玄關でした。

縁側に腰をおろして一服しながら、太郎のたどたどしい口のうごきに微笑を送っていた清右衛門が、すぐ取り次ぎに立つて行つたが、とたんにやや、うろたえ気味に引き返してきて、

「地主さんですよ」

小声で告げた。

馬琴も瞬間、うろたえた。朝がたの手紙に腹をたてて、ねじこんでも来たかと思つたのである。

客間に出てみると、だが相手は他意ない顔つきで、

「堀内六左衛門です」

穏やかに名のつた。

「かけちがつて、これまで御意を得ませんでした、思わぬ御縁で高名な滝沢先生の知遇を得、

光栄にぞんじております」

「あ、いや、愚老こそご挨拶その他、代人のみ差し立てて失礼いたしました。なにぶんにもごらんの通りの老耄……。おまけに一眼が不自由なため、つい目と鼻の先の外出すら思うにまかせません。ご容赦ください」

「さて、先刻の御書状ですが……」

と、手ぎわよく堀内は本題にはいった。

五十五、六……。武士にしては物腰の柔らかすぎる、身だしなみのよい小づくりな人物である。事務関係の仕事をしている南町奉行所の古参与力——と、この家の前の持ち主から聞かされたのを馬琴はにわかには思い出して、

「いやあどうも。あの手紙の件でわざわざお越しとは……」

いささか怯んだ言い方をした。カッとなると筆まめを發揮して、すぐ詰問口調の手紙など叩きつけるくせに、当の相手があらわれて詫びたり釈明などはじめると、その人柄や釈明のしかたにもよるが、馬琴はなんとなく忸怩となり、せっかくの気鋒も萎えて竜頭蛇尾に終るのが常だった。「あの笛掘りの男は、道ひとつへだてた向かいの百姓家の三男でして、辞儀の仕方さえろくにわきまえぬ野良育ち……。ご挨拶せよと申しつけておいたのを怠った無礼は、幾重にも拙者、お詫びいたします」

こころもち堀内は頭をさげた。

「それから垣を結えとのご指示ですが、ご気性の潔癖からすればむりもないご懸念とぞんじます。ただ、あの藪の笛は、自家はもちろん近所となり、親戚知友にくばっても消化しきれぬ朝ごとの採れ方で、過半は竹にし、それもあり密になるため向かいの百姓家に伐らせて遣わす始末なの

です。小緑ながら直参じきさんとなれば、公儀より恩借の地にはえる竹や筍をまさか商家に売りさばくわけにもゆかず、通行人が盗むならいつそそれもよしということで垣などもめぐらさず放置していたこれまででして……」

「よくわかりました。わたくしの性格として、ちと固くるしく考えすぎたようで……」

「そんなわけですからどうぞ先生のお宅も、わが家の藪と思召してご自由にお採りください。——もつともあの、筍というやつ、掘り出すのに少々コツがいりますし、古くしては味が落ちますので、毎朝二、三本ずつ掘りたてを勝手口に置かすことにしましょう」

ほとんど歯が抜けて、やわらかいところを細かに刻みこんだ炊き込み飯のほかは、煮つけても木の芽で和えても、いっさい筍の旨味は賞味できないことを、さすがにおくびにも出さなかったのは馬琴の都会人としての礼儀であった。

世間話を二つ三つして、やがて堀内は帰って行つたが、はやくも今日の分が供の下僕の手でかつぎこまれていたらしく、台所からは皮むきを手伝う子供たちのはしやぎ声にまじって独特のみずみずしい青臭さが、竹林のただ中に居を移したほどにも、おびただしくただよつてきた。

さっそく母親にねだつて太郎は紫蘇漬けの梅干しを筍の皮に包んでもらう……。

「うめぼち、ねえ、たちもうめぼち」

と、ようよう舌の回りがけたさちまでが同じものを母に作らせて、酢っぱいのを我慢しいしい舐める顔のおかしさに、お百は笑いころげ、釣られて馬琴までが台所を覗いた。

「竹の皮は、わりとよい値で売れますよお舅さん」

と清右衛門はこまかいことを言う。

「今年竹がこれから伸びはじめると、皮がばらばら剥け落ちますからね。拾い集めればたちまち

「二貫や三貫にはなるはずですよ」

「皮だって地主のものだ。黙って売りとばしなどしてはいけないだろう」

「でも、藪の清掃にはなるのですがねえ」

馬琴は書斎にもどり、茹であげられた筍が刻まれ、煮られ、飯に混ぜられて、ふっくら炊きあがる夕刻までふたたび著述に専念した。

筍を貰えるのはいいが、藪のおかげかもう蚊が出はじめている。どうも近ごろ、見えにくくなった一眼をかばいながら、とぼしい夕光の下へ机を出す馬琴につきまとい、細い蚊うなりも縁先に移動した。

「お祖父ちゃま、ご飯だよ」

「ごわん」

太郎とさちがつれ立って迎えにきた。三味線の撥型に折りたたんだ筍の皮の、梅干しでまっ赤に染まったのをさちはまだ口に咥えている。

「お百、清右衛門はどうした？」

と、茶の間の、ちゃぶ台の前に坐りながら馬琴は老妻にたずねた。

「帰りましたよ」

「せっかく筍飯ができたのに、食べさせていかせればよいではないか」

「このところ身体の具合がよくないとかで、灸点所に寄ると言っていました。筍は一本、大きいのを持たせてやりましたよ」

「身体がわるい？ ……あの、清右衛門がか？」

「当人も鬼の霍乱だと、言いわけしてましたけどね」

お百の手は、夫と話しながらも動くのをやめない。飯櫃から小皿へ、できたての筍飯をすこし取り分け、仏壇にそなえて燈明をあげる……。

初物が食膳を飾るたびに、欠かしたことのない宗伯への供養であるが、こんな気づかいのこまやかさは、お百にしては稀有なことで、

(母親は、やはり母親か)

と、めずらしみながら馬琴は見ている。

息子が生きていたころは諸事、気のつきよう気の使いようがと、いんかんで、その点、男にしては神経質すぎる宗伯と箸のあげおろしにぶつかり合っていたお百である。

たとえば飯が炊きあがり、膳ごしらえにかかつてから、やっと気づいて、

「そうだ、おかずがなかったんだっけ……。何か買って来なくちゃ……」

あわてるような迂闊さだし、揚げたて焼きたてを賞味する惣菜、熱くして食べるもの冷やして食べるものなど、手順よくゆくほうがむしろふしぎで、宗伯がいくら癩癩を起こし馬琴が苦虫をかみつぶしても、持つて生まれた性分は七十年代年間牢固として直らず、ここ十年ほどはそれに、老い惚けさえ加わって始末はいっそう悪くなってきたのだ。

しくじりも不手ぎわも、むじやきに認めるならまだ、可愛げがあるのだが、非難されると躍起になって、逆に相手をへこまそうとかかるのもお百の性癖の困った点だった。

「また鮭？ おひるも、ゆうべも、おとついの晩もそうだった。なんとかすこし、考えてくれてもいいと思うなあ」

文句を言い出す宗伯に、お百はあらがう……。

「塩引きを一匹、貰っちゃったんだもの、しかたがないだら」

「塩引きなら保つよ。ぶつつづけにこいつの焼いたのひと色じゃたまりやしない。せめて野菜のうま煮でも添えるとか、鮭なら鮭で大根と船場煮せんばににするとか、鮑きさせない工夫がありそうなんじゃないか母さん」

「お前もまるで小姑みたいに、つべこべつべこべうるさいねえ。私や鮑きないよ、幾日つづいたって塩鮭の焼いたのなら結構だよ」

「いつもそれだ。自分の好き嫌いでしか決めないんだから……。いいかい？ おれも父さんも酒を飲むわけじゃなし、料理茶屋へ旨いものをたべにゆくわけでもない。うちの食事だけが楽しみな毎日なんだぜ。まして父さんは一家を支えている働き手だよ。ありがたいという気がすこしでもあったら、せめて飯の菜ぐらい、もうすこし心をくばってあげてもいいじゃないか」

「父さんがどんな偉い先生さまか知らないけど、私や不器用でグズな、これだけの女だからね。自分でできるようにしなきゃいけないよ」

いつもいつも、そんなやりとりから双方が言いつくり、家を出てゆく死んでしまいたいという物騒な口走りにまで発展する今までのことだったのである。

馬琴の仕事を、お百はまったく理解しなかった。しようとする熱意もなかった。著述のくるしみ、対世間的な煩悶、名声と収入を維持するために払わなければならぬ不断の努力……いっさいそれらには無関心であった。頑健な身体と、道楽や放蕩などできない臆病できまじめな性質を持ち、書くこと読むことだけが性に合った夫ならば、働きに伴うだけの金はしぜんはいってくるのが当たり前であり、特にありがたがり相手をしたわったりする必要など、どこにあるかというの、彼女の考え方なのである。

「私だって一日中、家の仕事に追われているんだ」

たとえ働きぶりが無能でも、それはグズに生まれついたための、よんどころない結果なのであつて、

「できるところまでしかできやしない。そうだろ宗伯、人間、千手観音さまじゃないんだからね」

というのもお百の口癖だつた。

したがつて彼女は恵びれない。夕食がすめばさつさと寝てしまふ。茶ひとつ菓子ひとつ馬琴の書齋に運んだことはないし、追ひこみ仕事に夜を更かす夫の腹のすき具合などみじん、思いやる気持もないのであつた。

かえつて宗伯のほうが氣を使つて、寝そびれた夜など父の机のかたわらへ来、火鉢の炭をつぎ足すぐらいのことはする。たとえばその宗伯に、喧嘩腰でうながされて、卵などゆでて持つてきても、塩を添えることはケロリと忘れるお百なのだ。三十代四十代の、仕事も忙しければ彼自身、もりもり働きたいさかりのころは、妻の内助と理解にあたたく包まれて、傑作をものしているにちがいない他の戯作者仲間の家庭生活がうらやましく、叱言や不満を言い通したつた馬琴も、六十をすぎ七十にかかつた今は、さすがに馴らされ、あきらめてしまつてゐる。

宗伯に嫁でも迎えれば、若い女の氣働きで少しは潤う日常かとも、期待した時期があつたけれども、氣働きのない点、依怙地な点、まめまめしきや思いやりに欠ける点、お路も姑と五十歩百歩の嫁であつた。ますますあきらめを、馬琴は強いられた。茶道具を手もとに置いておき、火鉢に鉄瓶をたぎらせて咽喉が乾けば自分で注いで飲む。空腹でたまらなくなれば真夜中、鼠の走り廻る台所へおりて、冷や飯に金山寺味噌をまぶして食うような、他から見たらわびしさの骨頂にちがいない行為にも、くり返すうちには否応なく順応した。